**北島　一夫 （きたじま・かずお）**

**１、プロフィール**

詩人。詩誌「壱年」の創刊同人。詩誌「塔」を刊行。北詩人会を結成。風の樹社を創立、詩誌「偽画」を主宰する。定本詩集『生涯の歌』で第７回青森県文芸賞を受賞。

＜生没＞

1925（大正14）年７月７日～2012（平成24）年４月21日

＜代表作＞

詩集『生涯の歌』、

詩とエッセイ『統計調査員余話』、

定本詩集『生涯の歌』

＜青森との関わり＞

弘前市に生まれる。戦時中、弘前青年学校に通う。戦後、風の樹社を創立する。弘前ペンクラブ会員。

**２、作家解説**

北嶋（筆名　北島）一夫は大正14年７月７日、弘前市品川町に生まれる。父は大正９年に、八百屋を開業した。そして昭和12年11月11日に41歳で他界した。小学５年生の時であった。兄弟３人の長男であり、市内に年季奉公に出て家計を支えた。

戦時中、弘前に開校された青年学校に通い、講師をしていた一戸謙三と出会う。同年代の桜庭弘らと回覧誌「雑草」を出版。昭和20年に千葉県館山の洲崎海軍練習航空隊に入隊するも終戦を迎え、帰郷して家業の青果業に従事する。翌年、植木曜介が主唱して創刊した「壱年」に同人として参加。村　次郎とも交流している。また石黒英一らと「塔」を出版。22年12月に一戸謙三・高木恭造・植木曜介らと発起人となって北詩人会を結成し、「北リーフレット」（月刊）と「北」（季刊）を創刊する。23年に風の樹社を創立、詩誌「偽画」を主宰する。20年５月29日にルソン島で戦死した日幌草太（本名　佐藤喜代衛）の遺稿詩集『蒼い記録』を24年11月20日に風の樹社から上梓する。後記に「草太在りし日の姿を思ひ浮べながら纏めた」と心情を吐露している。28年に日幌草太の筆写本に基づき、高木恭造の『まるめろ』再販本を棟方志功の装幀で刊行した。また昭和40年に出版された竹内二郎の詩集『旧約』の企画、46年に刊行された『植木曜介詩集』の編集委員として尽力した。

昭和40年３月１日に詩集『生涯の歌』（26編）を津軽書房から限定300部で刊行する。平成19年11月１日に詩とエッセイ『統計調査員余話』を北方新社から刊行。家業の傍ら昭和22年から統計調査に携わり、大内兵衛賞（平成19年）等を受賞。弘前市統計協会名誉会長等を歴任。22年11月20日に定本詩集『生涯の歌』を風の木社から刊行。詩集「生涯の歌」に補遺を加えた定本である。表題は村　次郎、挿画は佐藤麻古杜で、愛惜と追慕の念が込められている。第７回青森県文芸賞を受賞。

平成24年４月21日、87歳にて永眠。

**３、資料紹介**

〇『定本詩集　生涯の歌』

図書

2010（平成22）年11月20日

210㎜×150㎜

昭和40年に刊行の詩集『生涯の歌』に補遺を加えた定本である。詩情にあふれ、純粋な精神性を感じる。「貧しいなかに日の美しい願ひを生きることが大切なのだ（父の鳩笛）」は、現在の私たちに向けられているようだ。第７回青森県文芸賞受賞。